

れは主に1277年の禁令の影響であることを特に強調している。著者の視点は、著者自身が述べているように、歴史的であって体系的ではない。しかしこれまでの研究が一般にこのような視点を欠いていたことは事実であり、この研究はそれを補うものとして有意義なものと言える。ただし、そうは言ってもスコトゥスの体系的努力に関して著者が不注意であるというのではない。実際、スコトゥスにおける目的因の後退に根拠を置いての分析には著者のその面での手腕もあることを感じさせる。すなわち、スコトゥス哲学における目的因の後退はスコトゥスにおける自由の首位性と軌を一にし、さらに目的論的倫理学の後退と軌を一にしていることは、著者の説明から充分に明らかである。

この研究は、全体的に見て、過去の研究に対する十分な日配りと歴史的観点の充実に目立った特徴をもっており、そこから得られているスコトゥスの神学的倫理学の全体像の分析は、書評子にもきわめて妥当なものと思われる。加えて詳しい親切な註は、この方面には暗い書評子にとって教えられることが多かった。スコトゥスに関するいくらか専門的な入門書としては、今のところ最高のものと思われる。

Marilyn McCord Adams: *William Ockham*

2 vols. University of Notre Dame Press, 1987. pp. xx+1402

清水哲郎

本書はオッカム哲学に、一貫した姿勢を保ちつつ、さまざまな問題面から迫るものであって、第一部：存在論、第二部：論理学、第三部：知識の理論、第四部：自然哲学、第五部：神学からなっている。まず、その内容を瞥見しておく。

第一部においては、前半で普遍に関する唯名論的・概念論的解決が、ことに概念のあり方についてオッカムが採った、それは思念対象として存在するとする理論 (objective-existence theory)、およびそれは理解する働きそのものだとする理論 (mental-act theory) との関わりにおいて議論される。吟味の中心は概念が「自然的に表示する」ということ、それを「類似」によっていかに説明しきれるかにある。

第一部後半では諸カテゴリーに関して実体個体と質個体のみをものとして認めた点が吟味され、結局、第一部においてオッカムの存在論の基本的立場が提示される。

第二部では『論理学大全』の構成にしたがって、項辞、命題、議論の理論が次々に論じられるが、著者がオッカムにとって基本的だとする存在論の視点から論点選ばれている。したがって、項辞論においては、表示の問題としては共義語-独義語、絶対表示語-共示語の区別のみが取り上げられ、代表の問題としては、個体代表の分類と特徴付けに関する近年の諸研究に応じた著者の議論が中心となる。ここでの著者の結論は、オッカムの目指すところは、量子子の文脈の定義を与えることでも、命題の真理条件を提示することでもなく、誤謬論への寄与である、というものである。また、命題論においては、「これはかつてあった」「これはあり得る」について、非現実の存在個体 (non-present temporalia や unactualized possibles) を認めるような存在論による解釈に対し、これらを「これがある、ということがあった」、「これがある、ということがあり得る」と解して、あくまでも語と現実が存在する個体間の意味論的關係のみで済むとする解釈が提示され、検討される。ここでも著者はオッカムの存在論的立場への関心から両解釈の吟味に力点を置いているが、第二の解釈に決定的に与している訳でもない。

第三部では明証認識と直覚知-抽象知の理論が扱われる。著者はオッカムの理論はロックの概念論的経験論に通じるところがあるとはいえ、知性が対象を間接的に(何らかの心的なものを介して)ではなく、直接に認識するとする点で、直接的実在論 (direct realism) の立場を採っているとする。また、この理論は我々が現に明証的判断をしているかどうかを判別し得る基準を与えるものではないが、だからといって、オッカムを懐疑論者の流れの中に位置づけることは不当だと論じている。

自然哲学を扱う第四部では、はじめにオッカムの質料-形相論が、まず質料と実体形相から成る事物(特に人間を中心とした生物)の形而上学的構造の問題として、実体形相が一つであるか複数であるかの議論をめぐる論じられ、次に質料、量、個体化、さらには、質的变化のありようが検討される。次に作動因に関する考察にうつるが、ここではオッカムの理論をヒュームのそれに連なるものであるとか、機会原因論や懐疑論であると解する通説が否定され、それが通常思われているよりも経験的ではないこと、また結果を産み出す「力 virtus」という考えがあることが指摘される。最後に主題となるのは運動と時間の存在論的位置付けである。

神学を主題とする第五部では、神の単純性と諸属性、信仰と理性、神における知、神における観念の複数性、神の能力と可能性の基礎、神の全能・全知と人間の自由、予定といったことが次々と論じられる。

以上、評者の関心にまかてせざっと見た限りでも分かるように、本書はオッカムに関する、きわめて包括的でしかも目配りの行き届いた哲学的研究である。「包括的」といったのは、倫理学および政治論関係のオッカムの思想を除くならば、オッカムが論じた全分野が、そしてほぼ全問題が吟味の組上に載せられているからである。「目配りの行き届いた」というのは、これだけ広範囲に目を向けながら、しかも個々の問題を詳細に検討し、それらの個々の問題が互いに連関し合ってオッカムの哲学となっている様子を描き出しているからであり、またその過程ではオッカムを、広くはプラトン、アリストテレス以来の哲学の議論の文脈において、またトマス・アクィナス、ドンス・スコトス、さらにはヘンリクス・ガンデリウス、ウオルター・シャットン、アダム・ウオダム、オートレクールのニコラウスといったオッカムの同時代者達の、同じ問題に対する対応の仕方に目を配りながら、オッカムの問題への応え方を分析しているからである。

本書はあくまでも「哲学的研究」のひとつである。というのは、著者はオッカムが問題にした問題に、あるいはオッカムについて問題になってきた問題そのものに自らも向かい、様々な立場ないし解決の選択肢を明晰判明に定式化して見せ、そこから帰結する困難を検討し、さらにその定式を改良するといった作業を行いつつ、オッカムは（またその同時代者達は）どの立場を選択し、そこから生じる困難にいかに応えたか、あるいは応えなかったかを公平に吟味するという方針を貫いているのである。したがって、著者の結論はオッカムに好意的であるとはいえ、決してオッカムに全面的に賛成するものではなく、また選択肢の一つを決定的に選ぶことなしに、問題が明らかになったところで終わることも多い。また著者は「オッカムの哲学的焦点は、論理学、また自然哲学や神学をする際にも、〈存在論〉と一般に呼ばれる形而上学の一分肢に合わせられている」（p. 3）として、その存在論に一貫して注目しつつけるのだが、その際の著者自身の見る目は、あるいはその背景にあるのは、ラッセルやクワインの主張が議論の対象になるような、現代哲学の文脈である。UCLA にあって、そういった現代の言語哲学を専攻する夫君をもち、D. カプランらとの交流のなかで培われてきた目を持って、著者はオッカムに対峙している（従って、たとえば野本和幸「現代の

論理的意味論」岩波 1988年などを参照しつつ本書を読むならば、著者の現代的関心がいかに反映しているかがより明らかになろう)。本書はこのような意味で、現代の哲学研究者が中世哲学をする仕方のひとつの見本となるであろう。

評者はオッカム哲学を研究するものとして、本書から実に多くの刺激を受け、また課題を与えられたと感じている。もちろん、アダムズの個別の議論と主張に対して、また全体的なオッカム把握についても、異を唱えたい点は多々ある。アダムズのオッカムに対峙する仕方についても（それが一つの哲学研究の姿勢であることを認めつつも）、評者としては違う仕方を採りたいと思う。

例えば、自然的表示について次のような定式が試みに挙げられ、吟味される：

「‘C’は概念の領域を動き、‘x’、‘y’は現実の存在者の領域を動くとする、Cがxを表示するのは、Cがxに類似している以上にCはyに類似しているというようなyが存在しない場合であり、またその場合のみである、ということが任意のxについて成り立つ。」

このように定式化するとき、アダムズは概念と現実の存在者を見比べる立場からこう記述するのであり、‘C’は概念そのもの、‘x’、‘y’は個体そのもののようである。しかし評者に言わせれば、オッカムはそのような見比べができる立場から事柄を見ていないし、また‘C’が概念=記号ならば、‘x’、‘y’もまた言語すなわち記号（この文脈では概念）であらざるを得ない。つまり、上記のように定式化したときに、すでにアダムズはオッカム哲学の基本姿勢を落してしまっていると、評者には思える。

さらに、さきに紹介したように、「これはあり得る」を非現実の存在可能個体の領域を認めて解釈するか、あるいは語と現実の存在個体間の意味論的關係のみを認めれば済む解釈を採るか、という吟味について、評者は別のアプローチによって後者に与するものであるが、ここからは、いかなる存在論的立場を採るかという問題もさることながら、むしろ〈表示〉をどう考え直すかという問題がより大きく浮かんでくるはずである。つまり現実に存在しない個体をも表示すると、しかもそのような個体の領域を認めないというのであれば、表示は一般に記号があり、ものがありそしてその両者の間に記号関係があるということとして記述し難くなるはずだからである（アダムズの解釈に従って、これをさらに「類似関係」として説明しなければならぬとすればその困難はさらに増す）。つまり、上述の定式化そのものが崩れるのではないか。

思うに、こういった定式化にはアダムズの見目——現代の論理的意味論——に由

来する問題把握が反映しているのであるが、評者に言わせれば、このようには定式化できないオッカム哲学の姿勢こそが、我々の同時代の論理的意味論に対して、オッカム研究者が提案することができる論点の一つである。

しかし、このように評者が対決的に論じるのは（また今後も様々な機会に論じたく思うのは）、本書を高く評価すればこそである。今後本書の多くの論点に関して、その吟味が諸研究者によって引き継がれ、検討されることがおおいに期待される。本書は、そのように読まれ、論じられることを期待する姿勢でこそ書かれており、またそれに価するものとなっている。

山田晶・倉松功編著

『キリスト者の敬虔——印具徹先生喜寿記念献呈論文集』

ヨルダン社，1989年 ix+p. 269

岡野昌雄

本書は、副題にあるように、印具徹博士の喜寿を記念しての献呈論文集である。8編の論文と、博士の特別寄稿2編の、合計10編が収録されている。編著者の一人である倉松功氏は、「あとがき」の中で、「日本のキリスト教界では、この敬虔という言葉は余り用いられない。のみならず、敬虔主義や体験主義の主観性や人間中心主義に対する弁証法神学の批判の影響もあってか、敬虔されてきた。しかし、敬虔はキリスト教の、特に、キリスト者の宗教性にかかわる中心問題であることに変わりない」と述べているが、これは当を得た指摘であろう。そのことは、他の宗教においても同様かもしれないし、さらにわれわれは、古代ギリシアにおいても、エウセベイアないしホシオテースが正義や知恵、勇気と並んで主要な徳の一つとされていたことを、思い起こすことができよう。その意味でも、本書は興味ある一書である。以下に各論文の簡単な紹介とコメントを記しておく。

『古代ローマにおける「ピエタス」思想の発展』と題する山田論文は、なかなかの力作である。自己と自己の根源である両親、祖国、神々との間の、自然の情愛としてのピエタスが、努力して実現すべき徳として、倫理や法律として客観化される。さら